

麗澤に学んで



令和 7 年度

麗 澤 中 学 ・ 高 等 学 校

麗澤中高の道徳教育

麗澤中学・高等学校では、毎朝のショートホームルームにおいて、教室に掲げた『心のカレンダー』（本校の教育理念の根幹である「モラロジー」の内容を、カレンダー形式に 31 の格言にまとめたもの（公益財団法人モラロジー道徳教育財団刊）を生徒が読み上げることから一日がスタートし、週に 1 時間全クラスで道徳の授業を行っています。この授業は本校の人間教育の大きな柱をなし、クラス担任が中心となって進めています。道徳の授業は、「モラロジー」を土台として「感謝の心、思いやりの心、自立の心」を育むことを念頭に、本校の教員がそれぞれの知識や経験に基づいて授業を展開します。

一方で、男子寮・女子寮では学園創立以来、道徳を実践する場としてのモラロジー教育・麗澤教育が脈々と受け継がれています。朝礼・夕礼、規律正しい集団生活を通して、父母・祖先・および恩人に感謝する心、相手を敬い思いやる心、率先垂範の心がけなど、様々なことを学んでいます。

ここでは、令和 7 年度卒業証書授与式における卒業生代表答辞、最上級生による「高校生活をふりかえって」、研修旅行の感想文などを紹介させていただきます。

令和 7 年度卒業式における卒業生代表答辞

卒業生代表 河口 萌香

答辞 肌寒さが残る中、慣れ親しんだ教室の匂いに、ほんのりと桜の香りが混じっているように感じます。本日はご来賓の皆様、保護者の皆様にご臨席賜り、このように盛大な式典を挙げていただきましたこと、卒業生一同、心より感謝申し上げます。

「温情春のごとく、善人敬慕う」。ちょうど一年前、私はこの場で在校生代表として、先輩方にこの格言を送りました。まさにこの格言を体現したような、春のように穏やかで、心の温かい先輩方のように、私たちも成長することができたでしょうか。今日という節目の日に、こうしてまた自分の思いを言葉にする機会をいただけたこと、大変光栄に思います。思い返せば、麗澤での生活は本当にあっという間でした。くだらないことでたくさん笑い合ったこと、授業が難しくてふと友達のほうを見たら、友達も困った顔でこちらを見ていたこと、先生がいつの間にか、私たちの名前をしっかりと覚えてくれていて、実はとても嬉しかったこと、そんな何気ない日常の中にも、たくさんの思い出が詰まっています。体育祭も文化祭も、最初から全てが円滑に進んだわけではありませんでした。意見がぶつかりあったこと、思うように形にならなくて立ち止まったこと、今振り返ってみると、全員が真剣だったからこそ起きたことだったのだと思います。たくさんの会話を重ねて築き上げてきた関係が、今ではかけがえのないものになりました。お互いを高め合いながら、私達はこの麗澤でそれぞれ成長してきたのです。

私が麗澤での学校生活を通して一番変わったのは自分自身の考え方です。以前までの私は、人からの見られ方を考えすぎてしまい、自分に自信がありませんでした。ですが、麗澤での学校生活の中で多くの人と出会って関係を深めていくにつれ、自分自身の考え方が変化し、人と関わることに對して前向きな気持ちになることができました。特に部活動と生徒会活動は自分の考え方が大きく変化した経験でした。

中学から続けてきた競技かるた部。先輩方が引退されていつの間にか自分が先輩という立場になりましたが、絶対的な強さを持っているわけでもなく、後輩の成長を痛感していた私は、「今の私はみんなからの期待に応えられないのではないか」と最後の大会への出場を迷っていました。ですが、そんな私に、「一緒に大会に出てほしい」と言ってくれた後輩がいました。私が後輩の成長を見ていたのと同じように、後輩も私の頑張りを見ていてくれたのだと、そのとき気づくことができました。

5年間つづけた生徒会活動。先輩方から学んできたことを活かして、生徒のためになることをしたいと強く思っていました。思いを形にすることは想像以上に難しく、生徒会長としての責任は今までとは比べ物にならないほど大きなものでした。それでも最後までやり遂げることができたのは、支えてくれた友人、後輩、先生方のおかげです。生徒からの要望を形にするまで時間がかかっても、私のスピーチが完璧でなくても、「いつも頑張ってくれてありがとう」、「今日の挨拶も良かったよ」、「何か手伝えることは言ってね」、と応援の気持ちを言葉にしてくれたことが、何よりも私の支えになりました。

私達の学校生活はいつも温かな言葉に包まれていました。気持ちを言葉にしてもらえることは、こんなにも嬉しく、心強いものなのだと、たくさんの人が私に教えてくれました。これから私達はそれぞれ新しい道を歩み、また数え切れないほど多くの人と出会います。その中で、次は私が誰かに言葉の力を伝えられるような人になりたいと思います。

だからこそ今、私は誰よりも感謝を言葉にして伝えたい人がいます。それは、家族です。私の話を聴いて向き合ってくれたお母さん。お父さん。私の大切なものを理解し、選択を尊重してくれて、私を信じてくれて、本当にありがとう。保護者の皆様、いつでも私達の味方でいて、応援してくださったこと、感謝してもしきれません。私達はこれからも、自分らしく、私達の信じる道を進んでいきます。どうかこれからも変わらぬまなざしで見守っててください。

在校生の皆さん、先ほどは心のこもった素敵な言葉をありがとうございました。皆さんに最後にお伝えしたいことは、一人ではないということです。皆さんはとても努力家で頼もしく、私達もそんな姿に何度も助けられてきました。ですが、何でも自分一人で解決する必要はありません。皆さんの周りには、皆さんの頑張りを見てくれている人が必ずいます。この先、一人ではどうにも上手くいかないことや、前向きな気持ちになれないこともあると思います。そんなときは、ぜひ周りを頼ってください。そして皆さんも一人で悩んでいる友人や後輩に、温かい言葉をかけてあげてください。その一言が、きっと誰かの力になります。

最後になりますが、本日ご臨席いただきましたすべての皆様への心からの感謝を込め、麗澤高校の益々の発展と皆様方のご健勝を心から祈念申し上げ、卒業生 224 名の答辞とさせていただきます。

時が過ぎていくのは早いもので、つい先日入学したと思ったらもうすでに卒業を迎えようとしています。自分は寮生となって高校生活を送る関係上、身の回りの関係のすべてが一新されました。その環境の中で三年間過ごして送った高校生活、そしてその中で成長した点は中学生時代の自分では想像することもできないほどであったと感じます。今回はそれらについてあらわしていけたら良いなと思います。

中学二年生の秋、突然親の転勤が決まりました。行き先は北海道でした。それまでは漠然と自分の地域にある高校に入学すると思っていたため、いきなりその選択肢が消えて「北海道にある高校に行く」のか「どこか寮のある高校に行って寮生活を送る」のかという、一度も考えたことがないような二択だけが残されていました。そしてその条件で探し、見つけた高校の中の一つが麗澤高校であり、その学校の説明会を訪れたときに自分が目にしたのは、大して年が離れているわけでもないのに壇上でハキハキ堂々と発表したり優しく丁寧に自分たちに接してくれたりしていた先輩方でした。そのような人間に自分もなりたいと思い入学した自分の選択は正解であったと強く思います。そうして入学した麗澤生活は変化の大きな三年間になりましたが、特に大きな転換点であると自分が思う経験があります。それは高校二年生のときに行った部活の合宿です。

高校三年生の先輩方が引退し、部長となって初めての大きな仕事でした。それまでは自分のことだけ見ていれば良いという認識が根底にありましたが、先輩方が引退し、自分が全体を鼓舞しなければならない、自分の背中には常に見られているという認識に変わってしまいました。だからどれだけ「もう動けない」と思っても頑張りを続けなければならなかったですし、第一手を抜いた瞬間に師範である野中先生から叱責が飛んできてやらざる得なかったというのがあります。「お前がチームを鼓舞して引っ張れ」とおっしゃってくださったのも野中先生でした。そうして自然と涙が流れてしまうほど苦しかった合宿でしたが、「リーダーとしての心構え」と「無理だと感じたその後こそ勝負である」、そして「苦しいことも終わる」ということを深く学べた合宿は、自分の精神面に大きな役割を果たしてくれたと強く実感しています。特に「リーダーとしての心構え」はその後に寮長となってさらに昇華できたのではないかと思います。

こうして自分の高校生活を振り返ってみてみると、本当に多くの人々に支えられて生活してきたなと感じます。寮生活の仲間はもちろんのこと、クラスでの友達、前述した部活での人々、関わってきた先生方、そして遠く離れていても常に支えてくれる家族、多くの人たちのおかげで成長することができました。みんなと腹の底から笑い転げた楽しい日々もなにかに集中して取り組めた日々からもらった恩です。しかし、その恩を結局返せずに終えてしまうことも学びました。ひどく悲しく、やりきれない思いであったことを強く覚えています。そうして酸いも甘いも味わった高校生活を通して、自分の背中があの日見て憧れた先輩方の背中に少しでも近づいていられたら良いなと思います。

私がこの3年間で、何度挫折してもそのたびに立ち上がりまた歩みだすことが出来たのは、沢山の人の支えがあったからです。

2年前の春、怪我で手術をした後松葉杖で広島から千葉に行くことになってしまったとき、親はとても心配したと思います。そんな心配とは裏腹に、私は入寮して思っていた3倍くらい楽しい寮生活を過ごしていました。スマホは全然使えなくなったけど、使えなくてもいつも誰かが傍にいて、楽しい話で毎日大笑いして生活していました。夏にやっとラグビーができるようになった頃、最初は走りながらまともにパスも投げられませんでした。入学からの出だしが遅れた分取り戻さないと、と一生懸命練習に取り組んでいましたが、最初の一年は公式戦のジャージを一度も着られずに終わりました。

その年の全国大会を観客席から見て帰ってきた日、私は日記を残していました。その内容の一部に「自分が試合に出ている姿、活躍している姿は想像できなかった。まだまだメンバーは遠い存在に感じた。熊谷まで行って皆は試合して、メンバー以外はフィットネスとサポート。寝て起きて少しは強くなったかもしれない、でも試合が一番成長できる、試合が一番楽しい。それがわかっているのにサポートするのは辛い。ただ応援して、ビデオ撮って、グラウンドにすら入れなくて、緊張も一緒に味わえない。上手くなりたい。強くなりたい。メンバーに入りたい。全国大会の緊張感をグラウンドで感じたい。一緒に喜んだり悲しんだりしたい。絶対にうまくなる。利用できるものは全部利用する。一番練習する。今までお世話になった人たちに恩返しする。」こう書いてありました。

そして5年生の年は、初めてを沢山経験することができて本当に楽しい年でした。初めて公式戦に出て、初めて合宿で追い込まれすぎて過呼吸になって、初めて全国大会に出ました。その年の公式戦で試合前に泣かなかったことはないのではないかとというくらい、毎試合前緊張で泣いていました。そんな私達を支えてくれたのは、先輩でした。自分たちも緊張しているはずなのに笑顔で大丈夫だよと声をかけてくれ、笑って勇気付けてくれました。試合中も体を張ったプレーで皆を引っ張ってくれ、こんな先輩になりたい、と思わせてくれました。そんな、頼りきりだった最高の先輩方も引退し、ついに最終学年を迎えて私はキャプテンになりました。

最初はキャプテンとして上手くチームをまとめることができず、全てがだめになりました。勝つ未来が見えず、ラグビーが楽しくなくなって、試合が怖くなりました。そしてサニックスを迎えて、良い結果を残せず終わりました。6年の春に立てた個人的な目標が「恩返し」だったのに、応援に来てくれた両親、祖母、恩師、に涙を見せてしまいました。夏合宿でも壁にぶち当たり、次の日朝5時から走るのにもかかわらず深夜1時頃までリーダー陣で話し合うこともありました。みんな勝つために、チームを良くするために必死でした。そして全国予選で桐蔭学園に敗れ、悔しさを胸に戦った最後の全国大会。ここまで本当に長くもあり短くも感じた一年でした。そして改めて私は幸せを感じました。勝利のために一緒に戦う仲間、応援歌を歌って声援を送ってくださる保護者の方々。広島から応援動画を送ってくれる大好

きな人達。何度もあの応援に勇気をもらいました。ですが結果は悔しいものになりました。本当に悔しくてたまらないですが、最後にやりきったと笑うことができたので、必笑というスローガンは達成できたかなと思います。本当に3年間で色々あったけど、一緒にチームを引っ張って、しょうもないことで笑い合い、愚痴をこぼし合い、常に高め合うことができた最高の同期には感謝しかありません。自分より努力している人がそばにいること、笑顔にさせてくれる人がいることはとても幸せなことだと思います。沢山笑わせてくれてありがとう。一緒にチームを引っ張ってくれてありがとう。沢山自主練に付き合ってくれてありがとう。しんどい時そばにいてくれてありがとう。愚痴を沢山聞いてくれてありがとう。多分人生で最上級に濃い3年間をこの同期と過ごせて幸せです。後輩の皆も、可愛い笑顔に何度も元気をもらいました。キャプテンらしいことは何もできていないけど、最後までついてきてくれて本当にありがとう。そして、これまで広島から支えてくれたお父さん、お母さん。大事な試合、一つも欠かさず見に来てくれてありがとう。見に来てくれて毎回本当に嬉しかった。良い試合ができなかった時、心配してくれているのはわかっていたけれど、あんまり話さなくてごめんね。話すと涙が溢れてしまう気がして必要以上に話せませんでした。麗澤に来て良かったことは、私は幸せものだ気づけたことです。家族に恵まれ、同期や後輩に恵まれ、環境に恵まれ、周りの人に恵まれました。一人では何もできない未熟な私でしたが、沢山のご縁で素敵な方々に巡り合い、人生で2度と味わえないかけがえのない経験の連続で、3年間本当に濃い時間を過ごすことができました。辛いときには寄り添ってくれて、立ち止まってしまった時には手を引っ張ってくれる。一歩踏み出して挑戦するときは背中を押してくれる。朝起きた時、「今日も頑張ろう」と思える原動力は、支えてくれる家族や仲間の温かさでした。本当にありがとう。

これからも感謝することを忘れず、一つ一つの出会いを大切に生きていきたいと思います。そして、まだまだ返し足りない、両親やお世話になった人たちへの恩をこれからもどんどん私なりのやり方で返していきます。お母さんお父さん、まだまだ私はラグビー人生を続けます、絶対ワクワクドキドキさせるから、その衝撃に耐えられるようにいつまでも健康でいてね。三年間支えてくれて、ラグビーを続けさせてくれてありがとう。大好きです。

高校生活を振り返って

6年生 神谷 心結

私の高校生活は、順調な三年間ではなかった。むしろ、思い通りにいかないことばかりで、何度も自分を見失いかけた時間だったと思う。それでも今、卒業という節目を迎えられるのは、多くの人に支えられ、そして自分自身が少しずつ前に進もうとしてきたからだと感じている。

高校二年生のとき、私は適応障害になり、しばらく学校に行けない時期があった。周りが当たり前のように通っている学校に自分だけ行けない日々はとても苦しかった。焦りと不安でいっぱい、「自分はもう戻れないのではないか」と何度も思った。それでも、先生方や両

親、そして友人たちからの言葉や支えがあったおかげで、やっと今までの生活に戻ることができた。自分のペースでいい、と自分自身で認められたあの経験があったからこそ、今の自分があると思う。

また、三年間の寮生活は、私の人生において大きな財産になった。中でも、「自分と仲間」それが寮生活で得た大きな宝物だ。集団の中で生活することで、自分という人間の役割、性格、人との関わり方などを深く考えることができた。毎日一緒に過ごす上で仲間との衝突は避けて通れないものだったが、それを乗り越えるたびに相手の気持ちを想像することや、協力することの大切さを学んだ。人とのつながりの中で生きるということを、身をもって実感した三年間だった。

この高校生活を通して、私は「助けられること」と「誰かを助けること」の両方を経験した。自分が苦しいときに無条件で、屈託のない笑顔で、手を差し伸べてくれた人たちがいた。その人達のおかげで今の自分がいて、今度は私も誰かの力になりたいと思うようになった。寮で同級生や後輩の相談に乗ったり、自分の周りで誰かが困っていたら声をかけたりすることができたのは、その気持ちがあったからだと思う。支えられながら、少しずつ自分も誰かの支えになれる、そんな大切な日々を送ることができた。

そして何より、この三年間を見守ってくれた両親への感謝を忘れてはいけない。私が学校に行けなくなったときも、焦らず、ただ「あなたのペースでいい」と言ってくれた。その言葉が、どれほど私の心を救ってくれたか分からない。どんなときも私を信じてくれた両親の存在があったからこそ、私は再び立ち上がることができた。

振り返ると、この三年間は決して楽しいことばかりではなかった。けれど、その分だけ多くのことを学び、強くなれた三年間だったと思う。これから先もきっと壁にぶつかることがあるだろう。でも「私は絶対大丈夫」、そう思えるようになった。たくさんの人の優しさと支えの中で成長した、この経験を胸に、これからも笑顔で前に進んでいきたい。

道徳感想文「他人の欠点我之を補充す」

6年生 本名 彩純

この格言は、他人の欠点を責めるのではなく、互いを補い合うことで成長できるという考え方だと思います。

私は昔から完璧主義なところがあり、自分に厳しく我慢を繰り返し、他人の評価ばかりを気にして、自己肯定感をすり減らしてしまっていました。まるで目に見えない何かに追い立てられるように心の休まらない日々を過ごしていました。そんなとき、ある大人に相談した際にかけられた言葉が、「完璧な人間って気持ち悪くない？」でした。言われたときはその言葉の真意が理解できませんでした。「完璧なら困ることもなくて生きやすいのに」と本気で思っていたからです。するとその人はこう続けてくれました。「完璧な人間には誰も集まってこないよ。足りないところを補い合えるのが人間なんだよ。」

その言葉をきっかけに、私はバドミントン部での経験を思い出しました。バドミントンは個人競技のイメージがありますが、本当は仲間同士で励まし合い、支え合わなければ強くない、団体の競技です。得意な人が苦手な人をカバーし、逆に自分の弱い部分を仲間が補ってくれます。お互いが完璧ではないからこそ生まれるつながりや信頼があり、それがチームの力になるのだと気付きました。決して完璧なチームではありませんでしたが、一人ひとり不完全な部分があったからこそ、互いに補い合うことができ、最高のチームになれたのだと、今では思います。人間関係もきっと同じで、欠点があるからこそ支え合うことができ、一人では得られない温かさを感じられるのだと思います。

それ以来、欠点に対する私の考え方も変わりました。以前は「欠点＝自分のダメなところ」と決めつけていましたが、今は「欠点＝まだ成長できる可能性」だと捉えるようにしています。こう考えるようになってから、自分の弱さを受け入れられるようになり、他者の弱さにも優しくなれた気がします。誰もが自分にはない良さを持っていて、支え合える存在なのだと信じられるようになりました。

私たちはこれから AI がさらに発展した時代を生きていかなければなりません。そんな時代だからこそ、人と人との温かいつながりを大切にし、自分らしく生きていくことが必要だと思います。間違えてもいいし、完璧でなくていい。大切なのは、自分の欠点を受け入れ、他者の欠点を補いながら関わることです。そして、自分の個性や自分にしかない魅力を自覚し、それを生かして生きていくことが、自分らしく生きるということなのだと思います。

私はこれから、誰かの欠点や弱さを責めるのではなく、受け入れ支え合いながら生きていける人になりたいです。そのために今の自分に必要なのは、まずは自分と向き合い、自分の欠点を受け入れ、自分の魅力を見つけていくことだと思います。たとえ完璧ではなくても、人の心に寄り添い、誰かの小さな支えになるような生き方をしていきたいです。

高校生活を振り返って

6 年生 堀尾 美弥

私が高校生活を振り返って、また道德の授業を通して得たことは、「人との出会いの大切さ、そしてそのことが当たり前ではない」ということです。私は一貫生で、麗澤に通い始めたのは 2020 年 4 月。ちょうどコロナの真っ只中で、最初は学校にも行けず、家で課題をやったり授業動画を見たりする日々からのスタートでした。そこから少しずつ状況が落ち着き、週ごと登校や時差登校を経て、ようやく普通の学校生活になりました。そんなふうに生活が戻る過程の中で、私は「誰かと会えること」や「関われること」が当たり前じゃないと気づきました。世界中で多くの人が苦しみ、命を落としてしまう状況を見ていたからこそ、人との関わりがどれだけ貴重なのかを実感するようになりました。実際に学校生活が再開し、部活動が始まると、その思いはあっという間に強くなりました。私は素敵な先生方や先輩、仲間、そして後輩たちと出会いました。振り返ると、部活は誰か一人でも欠けたら成り立たないことばかりです。実際に、部活動を行う中で部員が減って大会に出られるか危なくなった時期もあり、

その時こそ「人がいるからできるんだ」という感覚がより強く心に残りました。仲間がいてくれたから、自分も諦めずに頑張れたのだと思います。顧問の先生、一緒に練習する仲間、練習場所を貸してくださる方、大会を運営してくれる人、試合をしてくれる他校の選手、そして応援してくれる家族。大げさに思えるかもしれませんが、一人ひとりのおかげで、自分が毎日活動できていたのだと気づきました。こうした経験は、行事でも同じでした。6年生の体育祭で応援団の副団長を務めたとき、自分がまとめる立場になって、仲間の存在の大きさをさらに実感しました。アイデアを出してくれる人、動いてくれる人、裏で支えてくれる人がいて、初めて一つのものが形になります。「自分一人の力じゃどうにもならない」ということを、いい意味で思い知らされました。そしてこれもまた行事だけでなく、普段の学校生活にも言えることでした。授業の準備をしてくれる先生方、一緒に勉強して励まし合える友達、いつも気にかけてくれる友達たち。毎日の中に、支えてくれる存在が本当にたくさんいることに気づきました。麗澤の一つの特徴でもある、道徳の授業では先生方が自分なりに道徳の授業を作ってきてくださり、クラスを回って授業を行ってくださるのですが、ほぼ毎度の授業で共通して思うことが、人との出会いについてでした。また先生方のお話だけに限らず、同じく授業の中で行われるクラスメイトの発表を通して、自分の中に無かった視点や価値観に触れられたことは、私の考え方や選択肢を広げてくれました。こうして積み重なった経験が、学校生活をより豊かにしてくれたと思います。これらを振り返ってみると、学校生活を通して学べたことは、「人との出会いに感謝する」という気持ちでした。人はひとりでは生きていけません。支えてくれる人がいて、励ましてくれる人がいて、一緒に笑ってくれる人がいて、初めて毎日が成り立っています。何億もの人がいる中で偶然出会えた人たちとの縁は、本当に貴重で大切にしていくなさきだと思えました。関わってくれた人たちへの小さな恩返しが少しでもできるようにこれからも徳を積んで、精進していきたいと思っています。

九州研修旅行で学んだこと

5年生 河野 拓海

私は今回の九州研修でいろいろなことを学びました。大分から鹿児島まで九州をバスで縦断し、いろいろな場所を訪ねていき、様々な文化を知ることが出来ました。今回の感想文では、私が特に印象に残ったことを3つ挙げたいと思います。

まず1つ目は今回の研修での飛行機での移動を除いた移動距離の長さです。先程も申しました通り、大分から鹿児島までの約300キロをバスで移動しました。「他の学校と比べて九州縦断は珍しい」という話を聞いたときは、この九州研修の重要さをまた違う点で実感することができました。

次に2つ目は、おもてなしの心に溢れたバスガイドさんです。わたし達のバスのガイドさんは、自分たちを楽しませようと、いろいろな歴史の話、雑学、豆知識などを教えてくださいました。また、目的地が近くなると、疲れ果てて眠っているわたし達を起こしてくれたり、その目的地に関係する話をたくさんしてくれて、いつの時もわたし達を退屈にさせませんで

した。また、この研修に来る麗澤生のためだけに色々準備してくれたことも、話からよく伝わり、本当にバスガイドの方々のおもてなし精神には頭が上がりません。

最後に3つ目は、この九州研修には欠かせない特攻記念会館である「知覧」についてです。まず九州研修が始まる前、わたし達は事前勉強として「永遠の0」という映画を視聴しました。その中にもやはり、「特攻」というものがあり、当時の人たちにとっては「お国のために命をかけて行う攻撃」として、「軍神」とも呼ばれていました。その中には、やはり妻や愛する彼女、家族など、決して失うことの出来ない大切な宝物がある人もいました。そこも考えて自分は生きて帰るか、決死の覚悟をするか、選べない2択だと思いました。また移動時間も長かったため、バスの中でドラマを見ました。その中には、「なでしこ隊」と呼ばれる、特攻隊員が行くまでの間奉仕をする高校生がいるという話がありました。しかし、「軍神」と呼ばれている人たちのオーラは一切なく、その時に「特攻は本当に必要なものだったのか」と考えるようになりました。やはり決めるのは自分ではあるけれど、本当にこの人たちは悩み苦しんだのだろうかなど痛感しました。私はとある言葉を聞いたことがあります。「人には2つの死がある。1つ目は、物理的に命を落とす、つまり心臓が止まるという意味での死。もう一つは、その人の存在そのものが忘れ去られるという意味での死である。」この中での2つ目の「死」は物事にも置き換えられると思います。物事の「死」を免れるためには、いま、生きているわたし達が途切れさせることなく後世に伝え続けることしかありません。

最初の言い直しになりますが、本当にこの九州研修ではいろいろなことを学ばせていただきました。この研修を企画された先生方、いろいろな準備をしてくださった観光地やガイドの皆様に、感謝の意を示したいです。

畑毛研修で学んだこと

4年生 川端也大

今回の研修で廣池千九郎博士記念館を訪れ、創立者について今までよりも身近に感じる事ができた。特に印象に残ったのは、「道徳科学の論文」を執筆した部屋が「一生でいちばん苦勞し、霊を打ち込み、命をかけて書いた場所」だと説明されていたことだ。質素な机や床のしみから、博士が睡眠も削って一文字一文字に祈りを込めて書いていた姿を想像し、自分がどれだけ甘えて勉強しているかを考えさせられた。

講話の中で、当時博士号を取ることは今とは比べものにならないほど難しく、日本で数えるほどしかいなかったと聞いた。そんな時代に、自分の命を削りながら研究と実践の両方を続けた廣池博士は、本当に覚悟のあるすごい人だと思う。単に頭が良いだけでなく、人の幸せのためにその知識を使い切ろうとした生き方に、創立者としての重みを感じた。

また、富岳荘の表札にある「友遠方より来たる 皆自ら道を得て還る」という言葉は、今回の訪問そのものを表していると感じた。静かな畑毛の自然の中で先生の足跡に触れ、自分はどんな道を選びたいのかを考える時間になった。これからの学校生活では、テストの点だけを追いかけるのではなく、将来どんな大人になりたいかを意識しながら日々の行動を選んだ

い。特に、身近な家族や友人に対して思いやりを持って接することや、小さな約束を守ることなど、モラロジーの実践を少しずつ積み重ねていきたい。そして、いつか社会に出たとき、廣池博士のように自分の能力を誰かのために使える人間になりたいと感じた。
畑毛研修で学んだことを記入してください。

言語はすごい（イギリス研修に行って感じたこと）

3年生 吉田 小春

同じ言葉話すことで、生まれが違う国の人とでもコミュニケーションができる。当たり前のことだが、生まれた国も文化も人種も違う人と会話ができるなんてすごいことだと思う。共通の言葉話すことの楽しさや凄さを、実際にイギリス研修を通して実感することができた。

まず、イギリス研修に行く前、私はホストファミリーと会話できるのかもすごく不安だった。間違えることが恥ずかしかったからだ。オンライン英会話の授業は完璧な文章で話さないと思わないと思いついていた。その結果、英語で会話を長く続けることが出来ず楽しめなかったため、英会話の授業は苦手だった。その悩みを留学経験のある叔母に話したところ「間違ってもいいから何でも話すことが大事、完璧を求めすぎてあまり話さなかったことを今でも後悔している」と言っていた。せっかくの貴重な海外研修を後悔して終わらせたくないと思った私は、ホストファミリーとの会話を楽しんでしまおうと思った。

いざホストファミリーに会った時、はじめは緊張しすぎて何も話せなかった。質問をされても言葉が全く浮かばず、私の頭はパンク寸前だった。しかし、ホストファミリーが優しく話しかけてくれたりして、初日の夕飯が大好物のラーメンだったことから、緊張が徐々にほぐれていった。それでもやっぱり自分の気持ちを言語化することはとても難しかったが、身振り手振りだったり、自分の知ってる言葉を並べて積極的に話しかけたりした。そうしたことで、自分の伝えなかったことや話たかったことが伝わって会話が続き、盛り上がることでとても嬉しかったし、楽しいと感じた。

またホームステイを通してイギリスと日本では文化や習慣が大きく違うことも実感できた。だからこそ、普段使ってる日本語ではない言語を話して通じあえたことはとても楽しかった。

このようにイギリス研修を通して、言語はただ話すためのツールではなく、人と人とをつなげる大切なものだを知ることができた。これからも間違えることを恐れず、様々な国の人と交流していきたい。

僕が関西研修で身にしみて3つのことを主に体感することが出来ました。1つ目は、日本の歴史がとても長い間継承され続けているということです。今回の研修で行った神武天皇陵の神武天皇の時代から現代まで、長い間、日本の文化は受け継がれてきたことがわかりました。奈良の東大寺の大仏と、南大門の大きさと迫力とスケールの大きさは、自分の住む日本の誇れる歴史と文化だなと心から思いました。自分が教科書などで見たりした文化財だったり歴史のことは、教科書などで見るときよりも、遥かにすごいものだと思います、自分が知らなかった日本の歴史に深く驚きました。それに実際に通過しただけの場所であったお寺や跡などは、バスガイドさんが自分たちに丁寧に説明してくださり、言われないと絶対に体験できないようなことも体験することが出来ました。奈良や京都での引率でも、バスのガイドさんは歩きながら豆知識や、小話などをたくさん話してくれて、バスガイドさんなどの旅行会社のおかげで深く京都や奈良の街について知ることが出来ました。

2つ目は、身近の人に感謝をするということです。今回の研修旅行では自分達を指導してくださった先生方や、旅行会社の方々や、バスの人たち、旅館での方々などのご厚意で、楽しむことが出来ました。自分達のために大人はカバーしてくれて自分たちと違っていろいろなことに配慮してくださっていて、とてもありがたいと思いました。普段、親がなにかしていてもその実感はあまり湧いたりしなかったけど、今回は、何日間かの間、たくさんの人に支えられて過ごしているなど、思いました。特に、初日の旅行先で、自分の靴が磨かれてあったりだとか、奈良での講話のときに、靴を揃えてくださったことだったりだとか、大人は自分たちが思っている以上に自分たちのことを気にして、配慮してくださっているのだなど、深く思いました。京都でも宿を出発するとき、宿の人が優しく挨拶をしてくださったことで、一日をいい形で始めることが出来て、すごい嬉しい気持ちになりました。自分は自分のことだけで精一杯だけどいつか他の人のために配慮できるようになりたいと思いました。

3つ目は、神宮が神社とものすごく違うということです。単に違うと言っても、名前が違うとか大きさが違うとかではなくて、伊勢神宮は、入ったときのオーラと言うか感覚が違うということです。早朝参拝の時の空気の感覚は、今でもなんとなく覚えていて、冷たくて体の中を隅々までスーッと感じにすんなり広がってく感じは、どこのパワースポットとかでも感じたことがなく、驚きました。そしてもらった参拝の札のようなものは、パワーを感じて、今でもスマホケースに入れています。神宮の中にいた人たちも真剣で、ここは他の場所とは違う、と思ったが、そんなに厳かすぎるというわけでもなく、地域の人達にはお伊勢さんとして親しまれていて、周りも繁盛していて、全てにおいて他とは別のすごい場所だなと思えました。自分はこの研修で、楽しんだことはもちろん、学んだことや反省すべきことがたくさんありました。そのすべてをこれからの日常生活でひとつひとつ反省しながらより良い人に成長できるようになりたいと思いました。